

## 祖堂集卷第十七

江西下卷第四曹溪第四代法孫

大慈和尚、百丈に嗣ぐ、師諱は寰中。

僧有り辞す。師問う、什摩いすれの處にか去く。對えて云く、江西に去く。師云く、老僧を將取し去れ、得たり、や。對えて云く、但だ和尚のみに非ず、更に和尚に過ぐる者有るも、將去すること得る能わず。後に人有つて洞山に拳似す。洞山云く、但だ得たりと道え。ある僧が去ろうとした時、師が問う、どこへ行くのか。答えて云う、江西に行きます。師が云う、わしを連れて行け、よろしいか。答えて云う、和尚さんどころでなく、和尚さん以上の人でもお連れできません。後にある人が洞山にこの話をした。洞山が云う、ただよろしいと言いなさい。

・江西去 馬祖を念頭においたものである。僧の答えは人を連れて行くなんてことはどうしてもできません。江西は人に連れられて行くところではないという意か。

師上堂して云く、一丈を説取するは一尺を行取するに如かず、一尺を説取するは一寸を行取するに如かず、那の行處を説取し、那の説處を行取せん。

人有りて洞山に拳似す。洞山便ち歡喜して云く、大慈和尚、物の為に情切なり。僧便ち問う、彼中は則ち此の如し。此間すかんは還た有りや。洞山云く、有り。僧云く、若し与摩ならば則ち請わん。洞山云く、那の説き得ざる處を行取し、那の行じ得ざる處を説取せん。洞山又た云く、此の二途を離れて作摩生そまさん。僧對えて云く、此の二途を離れて、師の問わざらんことを請う。洞山云く、海上功秀又た作摩生。對えて云く、石人歌を唱い、幻人掌を撫す。人有りて雲居に拳似す。雲居云く、行時説路無く、説時行路無し。不説不行合に什摩の路を行ずべき。有る人樂浦に拳似す。樂浦云く、行説俱に到らば本事無く、行説俱に到らざれば本事在り。又た云く、大慈

和尚は則ち古佛なり。洞山和尚は則ち細憫なり。師又た拳するを聞きて云く、作家なり。

師が上堂して云う、一文を説いても一尺を行ずるには及ばないし、一尺を説いても一寸を行ずるには及ばない。その行処を説き、説処を行ずることだ。

ある人が洞山にこの話をした。洞山は喜んで云う、大慈和尚は大衆のためをはかって大変親切だ。僧がすぐに問う、あそこではそうですが、ここでは有りまじょうか。洞山が云う、有る。僧が云う、もしそうならおたずねします。洞山が云う、説き得ない処を行じ、行じ得ない処を説くことだ。洞山が又た云う、此の二途を離れてはどうか。僧が対えて云う、この二途を離れては尋ねないで下さい。洞山が云う、海上功秀はまだどうだ。答えて云う、石人が歌を唱い、幻人が手をたたきます。ある人が雲居に話した、雲居が云う、行ずる時は説く路はないし、説く時には行ずる路はない。不説不行ならばどの路を行くべきであるう。

ある人が楽浦に話した。楽浦が云う、行と説とがどちらにも到ることがないときは本事が無く、行と説俱に到らないときは本事がある。また云う、大慈和尚は古仏であり、洞山和尚は細憫だ。師は拳するのを聞いて云う、立派だ。

・海上功秀 屢気楼のことか。伝灯録卷十六石柱の伝などにも用例がある。

・細憫 よく判らないが、大慈は古仏だがそれに対して洞山はうるさい批評家だという意か。

師行脚せし時、三人同行し、女人の稲を収むるに逢見する次いで問う、退山の路何處にか去く。女人言く、蔦底に去く。師云く、前頭水深し、過ぎ得るや。女云く、脚を湿さず。師云く、上岸の稲と摩に好きことを得たり、下岸の稲と摩に次第勿きことを得たり。女云く、下岸の稲、惣に螃蟹かかにに喫却せらる。師云く、太香生。女云く、氣息無し。師云く、什摩いすれの處にか住在せる。女云く、只だ這裏に在り。三人屋裏に到る。其の女来たるを見て、一瓶の茶を點じ排批はいはいし了りて云く、請う、上座神通を用いて喫せよ。三人敢えて茶を傾けず。女云く、老婆の神通を呈し去るを看よ。盞子を拈起して便ち瀉すそきて茶を行す。

・この一段、伝灯録卷二十七に同様の話がある。

・太香生　いい匂いだな。

・無氣息　お前さん元気がないな。

・拈起蓋子云　女人が神通を用いたところ。

自外、行録あんろくを觀ず。化縁の終始を決せず。勅謚性空禪師定慧の塔。

福州西院和尚、百丈に嗣ぐ、師諱は大安、福州福唐県の人なり。未だ行状を觀ず、姓族を知らず。少より黃檗寺に於いて出家し、乃ち僧と為るに至り、本と聽習せんと擬ます。因みに、洪州の招提に在り、偶ま行脚僧の百丈の一二句を拏するを聞き、玄機少しく省覺するに似たり。介れ従り便ち百丈に造る。既に盛筵を觀、深く志慕に称う。礼して百丈に問うて云く、学人佛を識らんと欲求す。如何なるか是れ佛。百丈云く、太だ牛を騎りて牛を覓むるに似たり。師云く、識り得て後如何ん。百丈云く、人の牛を騎りて家に至るが如し。師云く、未審いぶかし、始終如何んが保任すれば則ち相應し去ることを得ん。百丈云く、譬えば牧牛の人の如し、鞭を執りて之を視、人の苗稼を犯さしめず。師茲れ従り旨を領し頓に万縁を息やむ。性辛勤を好み、言論に親しむこと少まなり。更に尋經討論せず、放曠任情し、夜は則ち山野に頭陀し、晝は則ち倍いよいよ執役を加う。

福州西院和尚、百丈に嗣法した。諱は大安で、福州福唐県の人。行状を見ないので姓族は知られない。若い時に黃檗寺で出家して僧となり、(經論を)聽習しようとした。ある時、洪州の招提寺に到り、たまたま行脚の僧が百丈の一二句を話すのを聞いて、玄機に少しはつとするとところがあつた。すぐさま百丈の所へ行つた。盛んな法筵を見て、深く自分の志慕に称つた。礼して百丈に問う、私は仏を識りたい、どのようなのが仏ですか。百丈が云う、人が牛に乗って牛を覓めるようなものだ。師が云う、仏を知つた後はどうですか。百丈が云う、人が牛に乗って家に帰るようなものだ。師が云う、では、始終どのように責任もつてゆけば相應することができましようか。百丈が云う、たとえば牛飼いが鞭を持って看視して他人の畑を犯させないようなものだ。師はこれより

納得して万縁を息めた。生まれつき勤勞が好きで言論に親しむことがまれであつて、經論を求めることがなかつた。ほしいままに夜は山野に頭陀し、昼はいよいよ勞働に励んだ。

後に祐禪師に隨い、共に瀉山を創む。則ち十数年間僧衆猶お小なし。師乃ち頭頭に耕耨し、處々に勞形す。日夜疲れを忘れ、未だ嘗て輒ち暇やすまず。瀉山見て語つげて曰く、安、汝勞役を少やめよ。師云く、和尚の五百の衆を觀るを待ちて、安は則ち休せん。久しからざるの間にして僧衆果して五百に至る。師乃ち勞心頓に擺み、或は房廊に坐し、凝たること株くわ杭の如く、或は靈洞に入りて月に十たび帰らず。癡なるが如く狂なるが如く、三十余祀、夜ごと第二第三座の間に在り。同流どうりゅう有りて私に其の身を觀るに燄えん介として通光す。衆人僉みなな曰く、定光仏なり、と。

問う、黃巢軍來たる、和尚什摩の處に向かつて迴避するや。師云く、五蘊山中。僧云く、忽もとし捉著せらるる時は作そち摩生。師云く、將軍を惱乱す、將軍を惱乱す。

問う、此の陰已に謝し、彼の陰未だ生ぜざる時、其中そこの事は如何ん。師曰く、此の陰未だ謝せざる時、阿那个あなごか是れ大徳。對えて云く、不会。師云く、此の陰未だ謝せざるすら尙會せざるに、与摩の時の事を問うて什摩をか作なす。

俗官有り問う、仏は什摩の處に在りや。師云く、心地を離れず。

ある俗官が問う、仏はどこにいるのか。師が云う、心を離れていない。

・心地 六祖壇經に「心地含性種、法雨即花生。自悟花性種、菩提菓自成」

又問う、雙峯上人何の所得か有る。師云く、法には所得無し、設い所得有るも本得を得るなり。

また問う、雙峯上人はどのような所得がおりでしょうか。師が云う、法には得られるという様なものはない。たとえあつたとしても、元來得ているものを得るだけのことだ。

・雙峯上人（宋）姚寬撰西溪叢語卷上に引用されている宝林伝の逸文に慧能を雙峯和尚と云う。慧能の章第二冊九七頁、「黄梅意旨何人得・・・師云、我不會佛法」を承けている。

・法無所得 金剛經を承けたもの。

問う、大用現前して軌則を存せざる時如何ん。師云く、用い得れば便ち用いよ。其の僧裸形にして師を遠ること三匝す。師云く、向上何ぞ道取せざる。僧纔に口を開かんと擬す。師は之を打ちて云く、這の野狐情。

羅漢和尚拈じて僧に問う、此の時に當つて作摩生か他に喝出せらるを免れ得ん。僧對えて云く、便ち抽身して出で去らん。羅漢云く、落脊の棒又た作摩生。僧却つて迴頭すらく、今日頼に某甲に遇へり。羅漢云く、閻梨の骨を識得せり。

問う、偉大な人物の發揮するはたらきが、一定の規則に枠付けされない時はどうですか。師が云う、やれるならすぐやることだ。その僧は素裸で師の周りを三回まわつた。師が云う、その先はなぜ云わんのか。僧が口を開こうとするや、師はこれを打つて云う、このきつねつきめ。

羅漢和尚がこの話をとりあげて僧に問うた、この様な時、どうしたら怒鳴られないで済むかね。僧が答える、するりと抜け出します。羅漢が云う、背中の棒をどうしようもないだろう。僧はふりかえつて、今日は私にお遇いになってよかったですね。羅漢が云う、お前の骨を觀てとつたぞ。

・今日頼遇某甲 今日私が落脊棒の相手になれてよかったですね。僧の負惜しみ。

・識得閻梨骨 前の僧の答を単なる負け惜しみととらないなら、僧をほめた話とも考えられる。

問う、一切の施為は盡く是れ法身の用なり、如何なるか是れ法身。師云く、一切の施為は盡く是れ法身の用なり。

問う、五蘊を離却して、如何なるか是れ本来の身。師云く、地水火風、受想行識、這个は是れ五蘊なり。

・この二段は師が質問者に何故問うのかを自からに問いなおさせたもの。

僧有り大滄に到る。師、面前の狗子を指して云く、明明个、明明个。僧便ち師に問う、既に是れ明明个。什摩と為てか刺頭して裏許に在りや。師云く、什摩の罪過か有る。人有り雪峯に拳似す。雪峯云く、滄山は是れ古佛なり。

ある僧が大滄(西院)のところによつてきた。師は面前の犬を指して云う、非常にはつきりとしている、非常にはつきりとしていゝる。僧はそこで師にたずねる、はつきりとしているのに、どうしてこんなところに頭を突つ込んでいるのですか。師が云う、(その犬に)何の罪があるというのか。ある人がその話しを雪峯に言つと、雪峯は滄山は古仏だと言つてほめた。

・明明个 ありありとしている。仏性を指している。興善性寛の莫伝灯録卷七には、問、狗子還有仏性否。師云、有。僧云、和尚還有否。師云、我無云とある。僧の問いは明明个だのにどうしてつまらぬ所に頭を突つ込むなどやらんでもいいことをしているのかということ。師の答えは、仏性あるものはそれらしくあるべしという觀念を打破している。

師又たの時に上堂して云く、汝諸人來つて安に就いて什摩をか求むる。若し佛と作らんことを欲得すれば汝は自ら是れ佛なり。一箇の佛を擔却して傍家に走りて颯颯、渴鹿の陽燄を越うに相い似て、何の時か相應し去ることを得ん。阿佉、佛と作ることを欲得するや。汝但だ如許多の顛倒、攀緣、妄想、惡覺、垢欲、不淨、衆生の心無くんば則ち汝は便ち是れ初心正覺の佛なり。更に何處に去つてか別に討めん。所以に安は滄山に在つて三十年來滄山の飯を喫し、滄山の尿を痢して、滄山の禪を學ばず。只だ是れ長に一頭の水牯牛を見て、落路して草に入らば便ち牽き出だし、人の苗稼を犯せば則ち鞭打し、調來伏去して可憐生にも人の言語を受け、如今一

時に變じて今の露路の白牛と作つて常に面前に在り。終日露迥迥地に趣つも亦去るを肯ず。汝道え什摩の語話ぞ。汝諸人各自身中に無價の大寶有り、眼門より光を放ちて山河大地を照らし、耳門より光を放ちて一切善惡の音響を領覽し、六門より晝夜常に光明を放つ。亦た放光三昧と名づく。汝自ら有るに何ぞ識取せざる。四大の身中に影在し、内外扶持して傾側せしめず。兩脚かくのこ若子く大にして、二碩を擔い得て、獨木橋上從り過るも亦た伊かれをして地に倒れしめず。且く是れ什摩物ぞ。汝若し毫髮も眞むれば則ち見る可からず。故に志公云く、内外追尋して覓むるも惣に無し、境上に施為して渾すべて大いに有り。

有る人拈じて石門に問う、古人言える有り、安は、瀉山に在つて三十年来、瀉山の飯を喫し瀉山の尿を痢し、瀉山の禪を学ばず。只だ是れ長に一頭の水牯牛を看て落路して草に入らば便ち牽き出だし、人の苗稼を侵犯すれば則ち鞭打し、調來伏去して、可憐生にも人の言語を受け、如今一時に變じて露地の白牛と作つて常に面前に在り。終日露迥迥地に趣つも亦た去るを肯せず。と。只だ如今、古人与摩に道う、意作摩生。石門云く、昔日は虎を話すすら尚お驚きしに、如今は虎を見ても怕れず。僧云く、古人の分上は則ち与摩なるも、学人の分上は如何ん。石門云く、我を取つて与え食わしむるに驢年も味を得んや。

ある時の上堂に云う、お前たちわしのところへやつて来て何を覓めようというのか。仏とすることを求めるなら、お前自身が本来仏なのだから仏を覓めにやってくるというのは一個の仏をかつて横道にそれて走りまわり、渴いた鹿が陽炎を追つ様なもので、何時になつたらそれと一つになれようか。お前が仏になりたいのなら、あれこれの道理にそむくことや、手掛かりを探し回る様なやり方や、間違つた考えや悪しき知覚や汚しい欲や不浄とか、衆生の心が無かつたらお前はそのままで初心の正覚の仏だ。今更どこへも探し求める必要はあるまい。それでわしは瀉山にいて、三十年来瀉山の飯を食い、瀉山の糞をたれたが、瀉山の禪は学ばなかつた。只だわしはひたすら、一頭の水牯牛本来の自己を見守り、道はずれて草中に入ればすぐに引つ張り出し、他人の作物を侵したりすると鞭で打ち、馴らしきつてきた。それで可愛いくも、人に言われる通りになつて、今ではいっぺんに變つて、露地の白牛になり、いつも目の前に居て、一日中まぎれもなくそこに居る。追つても去るうとしない。いったいお前たちはこれは何の話しと思つか、言ってみろ。お前たちはそれぞれ身中に、値をつけようもない宝を持っていて、眼から出る光は山河大地を照ら

し、耳から出る光はあらゆる善悪の音を聞き取る。六門からは、昼夜光を放っていて、放光三昧というものである。お前にちゃんとおるのにどうしてそれを見てとらないのか。お前の四大の色身の中にひらめいていて、内外ちゃんと支えている。両脚はこの様に大きくて、二碩の重いものでも擔ったままで、丸木橋を渡つても倒れさせることはない。さてそれは何物であるうか。お前が一寸でも見つけようとするれば見ることはできない。だから志公は言っている、内や外に追っかけて求めてもどこにもない。それは対象の上に働いていて、ちゃんとあるのだ、と。

ある人がこの話をとりあげて石門にたずねた、古人は言っております、わしは瀉山に在つて三十年来・・・去ろつとしない。さて今、古人があのように言っているのはどういふつもりでしょうか。石門が云う、昔は虎の話を聞いてさえも驚いたものだが、今は虎を見てもこわくない。僧が云う、古人の分上ではその通りですが、私の分上では如何でしょうか。石門が云う、このわしをとつて食らわせても、いつまでもわしの味を見てとれまい。

・露遍適地 まぎれもなくそこにある。前段の明明くと同じ主旨である。

・志公 寶志の十二時頌の十二番目の句である。伝灯録卷二十九「雞鳴丑、一顆圓光明已久。内外推尋覓總無、境上施為渾

大有、云

師、闍城に垂化して二十載、中和三年癸卯の歳十月二十一日に至つて順化す。勅謚圓智大師正眞の塔。

處微和尚、西堂に嗣ぐ。師仰山に問う、汝の名は何摩ぞ。對えて曰く、慧寂。師曰く、阿那个は是れ惠、阿那个は是れ寂。對えて云く、只だ目前に在り。師曰く、你は猶お前後在る有り。對えて曰く、前後は則ち且く置く、和尚還はた曾つて見しや。師曰く、喫茶し去れ。

處微和尚、西堂に嗣ぐ。師が仰山に問う、お前の名前はなんだ。答えて云う、惠寂です。師が云う、どれが惠でどれが寂なんだ。



答えて云つ、和尚さんの眼の前にごさいます。師が云う、お前はまだ前後が残っている。答えて云う、前後のことはさておいて、和尚さんはごらんになりましたか。師が云う、喫茶去。

・喫茶去 茶を飲みに行け。出直してこい、という意。

問う、三乘十二分教は理を躰し妙を得。是れ祖師の意なりや、為復た祖師の意ならざるや。師云く、三乘十二分教は理を躰し妙を得、何處に更に祖師の意有りや。与摩なりと雖然も、須く六句の外に向かつて鑿るべし。若也鑿不得ならば聲色に随つて轉ぜん。僧云く、作摩生か是れ六句。師云く、語底、嘿底、不嘿底、不語底、惣に是、惣に不是。

・若也鑿不得云 もし六句外に鑿取できなかつたら、声色のあとを追いまわしてどこまでもひきずりまわされるばかりだ。

雪岳陳田寺元寂禪師、西堂に嗣ぐ、溟州に在り、師諱は道義、俗姓は王氏、北漢郡の人なり。未だ之を妊まざる前、其の父白虹の室に入るを見る。又た母夢中に僧の同床に寝ぬるを見、覺めて香氣芬馥たるを聞く。父母愕然として共に相い謂いて曰く、斯の嘉瑞に拠りて必ず聖子を得んと。半月を経て有身を知る。因りて胎に在ること三十九月にして方始めて産生す。分娩の旦忽ち異僧有り、錫を杖して門に到りて曰く、今日産む所の児の胎、河に臨むの岬に置く可し。言い畢つて忽然として見えず。遂に僧の言に従つて胎を將つて之を埋む。大鹿來りて守り、年を終つるまで去らず。經歷の人見て害心を起さず。瑞に因りて出家し、法号明寂なり。建中五年歲次甲子を以て、使の韓瓘、号は金讓恭なるに随つて海を過りて唐に入る。直に臺山に往きて文殊を感ず。空に聖鐘の響を聞き、山に神鳥の翔けるを見る。遂に廣府の寶壇寺に届り、始めて具戒を受く。後、曹溪に到り、祖師の堂を礼せんと欲す。門扇忽然として自ら開き、瞻礼三遍して出づるに門閉すること故の如し。次いで江西洪州開元寺に詣り、西堂智藏大師の処に就いて頂謁して師と爲し、疑を決して滯を釋く。大師は猶お石間の美玉を撫い、蚌中の真珠を拾うがごとし。謂いて曰く、誠に以て法を傳う可きは斯の人に非ずして誰ぞ。名を道義と改む。是に於いて、頭陀して百丈山懷海和尚の処に詣る。一に西堂に似たり。和尚曰く、江西の禅脈

捨に東國の僧に属せしか、と。余は碑文の如し。

東國桐裏和尚、西堂に嗣ぐ、師諱は慧徹、謚号寂忍禅師照輪清淨の塔。

東國實相和尚、西堂に嗣ぐ。師諱は洪直、謚号證覺大師凝寂の塔。

東國慧目山和尚、章敬に嗣ぐ。師諱は玄昇、俗姓は金氏にして東溟の冠族たり。父諱は廉均、官は兵部侍郎に至る。妣朴氏胎孕の際、夢に常に殊ることを得たり。貞元三年五月五日を以て誕生せり。

纔かに童心有るや、便ち佛事を知れり。毎に水を汲みて以て魚に供し、常に沙を聚めて塔を為る。年壯齒に至りて、志出家を願う。既に浮海の囊を持ち、遂に掩泥の髪を落せり。

元和三年、遂に具戒を受く。

長慶四年、大唐に入り、太原府に至りて二寺に歴居す。頗(？)志已に成り、本國王子金義宗の詔を奉じて東歸するに随えり。開成二年九月十二日を以て本國の武州會津に達せり。南缶の實相に之を安ず。敏哀大王、神武大王、文聖大王、憲安大王、並びに師資の敬を執り、臣伏の儀を徵せず、王宮に入る毎に必ず命じて座を敷きて誦法せしむ。開成の未より苑を慧目の山埵に結ぶ。景文大王、命じて高達寺に居らしむ。奇香、妙葉、闕くると聞けば必ず供す。暑騰、寒裘、時を待ちて授く。

九年秋、解夏の始め、忽ち門人に告げて曰く、我れ今歳内に法縁當に盡くべし。徐等宜しく無遮大會を設けて、以て百巖傳授の恩に報じ、吾が志を終わらしめよ。十一月十四日中夜忽尔として山谷震動し鳥獸悲鳴せり。寺鐘撃つも而も響かざるもの三日。十五日未だ曙ならざるに、遽に侍者に命じて無常鐘を撞かしめ、脇席にして歿る。享年八十二、僧臘六十なるみ。

・浮海之囊 涅槃經十一聖行品「譬如有入、帶持浮囊、欲渡大海、(中略)菩薩摩訶薩護持禁戒、亦復如是」。

・掩泥之髮 太子端應本起經卷上、「稽首佛足、見地濯濕、即解皮衣、欲以覆之、不足掩泥、乃解髮布地、令佛蹈而過」。

・金義宗 通暁大師の伝にも出る。

・百巖 章敬を指す。伝灯録七、「京兆府章敬寺懷惲禪師……初住定州栢巖」。

公畿和尚、章敬に嗣ぐ、河中府に在り。

人有つて問つ、如何なるか是れ禪、如何なるか是れ道。師云く、名有るは大道に非ず、是非は俱に禪ならず。此中こちの意を知らんと欲せば、黄葉止啼錢。

・黄葉止啼錢 泣く子をあやすために、黄葉を小判だといつてだます。涅槃經嬰兒行品などに見える喩え。

関南和尚、塩官に嗣ぐ、襄陽に在り。師、諱は道常。樂道歌有り、曰く、三界は燄の如く、六道は幻の如く、聖賢世に出するも電に同じ。国土は猶お水上の泡の如く、常無く生滅して頻に遷変す。唯だ摩訶大般若の、堅きこと金剛の如くして是れ羨やむ可き有るのみ。軟らかきこと兜羅に似て大なることは空に等しく、極小の憊塵にして見る可からず。之を擁して聚らしむるも而も聚まらず、之を撥して散ぜしむるも而も散ぜず。耳を側てて聞かんと欲するも而も聞こえず、瞪目して之を觀るも而も見る能わず。歌い復た歌い、盤陞の石上笑いて呵呵。嘆い復た嘆い、青蘿の松下高声に叫ぶ。頓みに此の明珠を獲て自従りよ、帝釋輪王都て要せず。是れ山僧獨り施為するならず、古え自り先賢よ此の調を作す。坐禅せず修行せず、任運に逍遙して只摩に好し。但だ万法懐に干せざることを知らば、無始より何ぞ曾つて生老有らん。

・兜羅 草木の花絮をいう。

溟州嶺山故通暁大師、塩官に嗣ぐ、法諱は梵日、鳩林の冠族金氏なり。祖諱は述元、官は溟州都督に至る。廉平にして俗を察し、竟

猛にして人に臨む。清風尚お民謡に在り。餘烈原作列傳に備わる。其の母支氏、累葉の豪門なり。世婦範と称す。其の懐妊の際に及び、夢に日を捧ぐるの祥を徴せり。爰に元和五年庚寅正月十辰を以て、胎に在ること十三月にして誕生す。螺髻の殊姿、頂珠の異相あり。

年十五に至り誓つて出家を願ひ、父母に諮る。二親共に相い謂いて曰く、宿縁の善果なり。志を奪つべからず、と。汝須く先ず度すべし。吾れ未だ度せず。是に於いて采を落とし親を辞して、山を尋ねて入道せり。

年二十に至り、京師に於いて具足戒を受く。淨行圖備し、精勤更に励む。緇流の亀鏡と爲り、法侶の楷模と作る。

大和年中に泪び、私かに誓願を發すらく、中華に往遊せんと。遂に入朝王子金公義琮に投じ、懐う処を披露せり。公、善志を重んずるを以て、許して以て同行せしむ。其の舟楫を假りて唐國に達せり。既に宿願に諧い、便ち發して巡遊す。遍く知識を尋ね、彼の塩官濟安大師に參ぜり。

大師、問うて曰く、什摩いすれの處より來たるや。答えて曰く、東國より來たり。大師進んで曰く、水路より來たるや、陸路より來たるや。對えて云く、兩路を踏み來たらす。既に兩路を踏まず、閩梨争でか這裏に到るを得ん。對えて曰く、日月東西するに什摩の障碍か有る。師曰く、實に是れ東方の菩薩なり。

梵日問うて曰く、如何なれば則ち成佛せん。大師答えて曰く、道は修するを用いず、但だ汚染すること莫れ。佛見、菩薩見を作すこと莫れ。平常心是れ道なり。梵日言下に大悟し、慇懃なるもの六年。

後、師薬山に到る。薬山問う、近ごろ什摩の處を離れしや。師對えて曰く、近ごろ江西を離れたり。薬山曰く、什摩をか作し來たる。對えて曰く、和尚を尋ね來たり。薬山曰く、此間路すかん無し。閩梨作摩生か尋ぬる。師對えて曰く、和尚更に一步を進むることは

即ち得たり、學人も亦た和尚を見ず。藥山曰く、大奇、大奇、外来の青風、人を凍殺す。

恣に遊方して、遠く帝里に投せんと欲す。會昌四年僧流を沙汰し、佛宇を殷墾するに値い、東奔西走するも身を竄すに所無し。河伯の引道を感じ、山神の送迎に遇う。遂に商山に隠れ、獨居して禪定す。墜果を拾つて以て齋に充て、流泉に掬して渴を止む。形容枯槁し、氣力疲羸するも、未だ敢えず出行せずして直に半載を踰えたり。

忽ち異人を夢みるに云く、今行く可しと。是に於いて、強いて前行せんことを謀るも力未だ杖す可からず。須臾にして山獸、口に餅食を嚼みて座側に放けり。其の故に与えしを慮りて収めて焉を喰う。

後、韶州に向かつて祖師の塔を禮せんことを誓いしを以て、千里を遙けしとせず曹溪に詣るを得たり。香雲忽ち起こりて塔廟の前に盤旋し、靈鶴倏ち来たりて樓臺の上に嘹唳せり。寺衆愕然として共に相い謂いて曰く、此くの如きの瑞祥は、實に未曾有なり。應に是れ禪師來儀するの兆なるべし、と。

是に於いて故里に歸りて佛法を弘宣せんことを思ふ。却つて會昌六年丁卯八月を以て、還た鯨浪を涉り、鷄林に返りたり。亭亭たる戒月光り玄兔の城に流れ、皎皎たる意珠照らして青丘の境に徹す。

大中五年正月に暨び、白達山に於いて宴坐す。溟州都督金公仍りて請うて嶺山寺に住せしむ。一たび林中に坐するや四十餘載。列松をば行道の廊と為し、平石をば安禪の座と作せり。

問う有り、如何なるか是れ祖師意。答えて曰く、六代曾つて失せず。

又問う、如何なるか是れ納僧の務むる所。答えて曰く、佛の階級を踏むこと莫れ。切に忌む他に随つて悟ることを。

咸通十二年三月、景文大王、廣明元年、憲康大王、光啓三年、定康大王、三王並びに皆な特に御礼を延原作<sup>つ</sup>へ、遙かに欽仰を申べ、國師に封<sup>ほう</sup>ぜんと擬す。各おの中使を差して迎えて京師に赴かしめんとす。大師久しく堅貞を<sup>ほ</sup>む。確乎として赴かず。

忽ち文徳二年己酉四月末に於いて、門人を召して曰く、吾將に他往せんとす。今須らく永訣すべし。汝等世情、淺意を以て乱動悲傷すること莫れ。但だ自ら心を修して宗旨を墜さざれ、と。即ち五月一日を以て右脇累足し、嶺山寺の上房に示滅せり。春秋八十、僧夏六十、謚号通曉大師、塔は延徽の塔と名づく。

普化和尚、盤山に嗣ぐ、鎮州に在り。未だ行録を觀ざれば化縁の始終を決せず。

師、市裏に在つて馬歩便に遇見し、便ち相撲の勢を作せり。馬歩使便ち打つこと五棒す。師云く、似たることは則ち似たるも、是なることは則ち是ならず。

師は市中で馬歩使に出会つと相撲をとる格好をした。すると馬歩使は五棒くらわせる。師が云う、らしいことはらしいけれども、そつかといえはそつではない。

・便作相撲勢 原文には作の字がない。

・馬歩使 馬歩軍の指揮官。

師、尋常暮れては塚間に宿り、朝には城市に遊び、鈴を把つて云く、明頭に來たるも也た打ち、暗頭に來たるも也た打つ、と。林際和尚、此の消息を聞き、侍者をして師を探らしむ。侍者來たりて師に問えり、明ならず暗ならざる時、事作摩生。師曰く、明日大悲院に齋有り。侍者歸り來たつて林際に拳似す。便ち歡喜して云く、作摩生か他を見ることを得ん。

久しきに非ざるの間にして、普化自ら林際に上来せり。林際便ち歡喜して飢食を排批し、對坐して喫せり。師は只だ是れ下底の物のみ惣に喫却せり。林際云く、普化は食を喫すること一頭の驢に似たり。師便ち座を下り、両手もて地を托して便ち驢聲を造せり。林際無語。師云く、林際は厮兒、只だ一隻眼を具するのみ。

後、人有つて長慶に拳似す。長慶林際に代わり語を進めて云く、也た且くま従す。更に作摩生。又普化に代わつて云く、長老が此の一間を申ぶることを被り、直に酪酩酊なることを得たり。

師はひごろ日が暮れると墓場にやどり、朝になると市中に遊んで、鈴を持ちながら云つのだつた、明頭に来ても打つ、暗頭に来ても打つ。林際和尚がこの話を聞いて侍者に師を探らせた。侍者が来て師に問う、明でもなく暗でもない時は、事はどうですか。師が云う、明日大悲院で齋会がある。侍者はもどつて林際に拳似する。すると林際は歡喜して云う、どつしたらこの男に会えるかな。

ほどもなく、普化の方から林際にやつて来た。林際は歡喜して食事をしつらえ、對坐して食べた。師はおかずだけを食へに食へる。林際が云う、普化の食べぶりは口バそっくりだ。すると師は座をおりて、両手を地について口バの鳴き声をあげた。林際は無語である。師が云う、林際は小せがれ、片目あるのみ。

のちある人がこの話を長慶に提示した。長慶は林際の無語に代わつて語を進めて云う、まあそれはそれとしておこう、それから先はどうだ。今度は普化に代わつて云う、あなたにこの一間を問われてすっかり酪酩酊いたしました。

・明頭来也打暗頭来也打 普化のこの遊戯の話は臨濟録にも出ている。入矢義高「明と暗」(『空花集』八八頁)参照。

林際又た問う、大悲の菩薩、身を分かつこと千百億、便ち現ぜんことを請う。師便ち地に卓子を擲ち、便ち舞う勢を作して、吽吽と云つて便ち去る。

林際がまた問う、大悲の菩薩は千百億に分身する。どうか現れたまえ。師は机を地になげうち、舞いの様子をして吽吽といって

出て行く。

又た林際上堂し、師、侍立する次いで、一僧有つて面前に在りて立てり。師、驀に林際の前に推倒せり。林際便ち杖子把つて打つこと三下せり。師云く、林際は廝兒、只一隻眼を具するのみ。

また、林際が上堂し、師が侍立したとき、ある僧が師の面前に立つていた。師は真つ向からその僧を林際の前におし倒した。すると林際は杖で三度たたいた。師が云う、林際は小せがれ、片目あるのみ。

又た林際、師と聖僧を看る次いで、林際云く、是れ凡か、是れ聖か。師云く、是れ聖。林際便ち咄と喝せり。師は便ち撫掌大嘆せり。

また、林際が師とともに聖僧を觀ていたとき、林際が云つた、凡夫か、聖者か。師が云う、聖者だ。すると林際は咄とどなつた。師は手をつつて大笑した。

師、一日を得て、手に函板を擎げ、郭を遶りて人に辞して云く、我は遷化し去らん。衆人雲集して相隨えり。東門よりして出でて云く、今日は好からず。二日南門、三日西門にせしに、人衆漸く少くして信ぜず。第四日、北門よりして出するに、更に一人の之に隨う無し。自ら塚門を壁磔して卒せり。

師はある日、手で棺桶をささげ持ち、外城をめぐつて人々に告げて云つた、わたしは遷化しに行くんだ。人々は雲集してついて行つた。師は東門から出て云う、今日は具合がわるい。二日目には南門で、三日目には西門でそうすると、人々はだんだんと少なくなり、誰も信じなくなつた。四日目北門から出ると、もう一人もついて来るものがなかつた。師は自分で墓の門を煉瓦で塞ぐと、遷化した。



嵩巖山聖住寺故兩朝國師、麻谷に嗣ぐ、法号は無染、慶州の人なり。俗姓は金氏、武烈大王を以て八代の祖と為す。大父、名は周州、品は眞骨に在り、位は韓察に居す。高僧皆な相と為り將と為る。父、範清と名づく。族品は眞骨より降るもの一等、郷談の得難なり。母華氏夢に脩臂の天人の藕花を垂授するを感じ、此れに因りて娠有り。又の時に夢中に胡の道人の十戒を授けて胎教を為せり。耆を過ぎて誕せり。

十二歳を以て雪岳の五色石寺に落染す。法性禪師なる有り。嘗て楞伽の門を其の中夏に扣けり。大師は師に事うるもの数年。

長慶の初め入唐し、佛爽寺に到りて道を如滿に問えり。江西の印を印可す。而も應對に慙ずる色有り。曰く、吾は人を閱すること多し、是くの如き東國の人有ること罕なり。他日、中國失禪の時、將に之を東夷に問わんとす、と。

又、麻谷寶徹和尚の處に到る。服勤執役するに擇ぶ所有ること無し。人の難しとする所の者は必ず能く之を易しとす。衆人目して曰く、禪門の中、異徳高行なりと。徹公曰く、我が師、馬和尚、我に訣して曰く、若し東人の目撃す可き者を得ば、畎渠道中、慧水をして丕いに海隅を冒おもわしめよ。徳を為すこと淺きに非じ、と。師の言耳に在り、吾は汝の來たるを喜ぶ。今印して禪侯に東土に冠たらしむ。往け欽なるかな。

已に心珠を麻谷に得、會昌六年本國に廻歸せり。

大中元年、始めて嵩巖山聖住寺に就居す。僧徒千衆、名十方に震う。是に於いて大師、珠を嵩巖寺内に吐き、印を祖師根中に授く。是れに繚りて兩朝の聖主、天冠地辺に傾き、一國の臣寮頭面もて足下に礼す。

大師禪定の餘暇、求めに應ずるの機縁。

人有りて問うて曰く、無舌土中、師無く弟無し。何が故に西天二十八代より唐代六祖に至るまで、燈を傳えて相照らし、今に至るまで絶えざるや。答えて曰く、皆な是れ世上流布なり、故に正傳ならず。

問うて曰く、一祖師中、二土を具するや。答えて曰く、然り。是の故に仰山云く、両口、一は無舌、即ち是れ吾が宗旨なりと。

・禅門撮要下の中の宝蔵上に、海東無染國師無舌土論として引くものを参照。

問うて曰く、一祖師中、二土を具すること如何ん。答えて曰く、正傳の禅根は法を求めず、故に師も亦餉せず。是れ無舌土と為す。實に法を求むるの人に應じて、名言の説を假ることを用う、是れ有舌土と名づく。

然うして則ち文孝康王は以て國(原作事)師と為す。然る後、定康大王、位に即き、皆な前規を承けて奉迎せり。然り而つして年、九十に當り、闕に上る能わず。國師、文徳元年暢月二十七日を以て示滅す。謚号大朗慧大師白月葆光の塔。

天龍和尚、大梅に嗣ぐ、未だ行録あんろくを觀ざれば化縁の始終を決せず。

正原和尚、五洩に嗣ぐ、同じく龜山に住す。姓は蔡、宣州南陵縣の人なり。貞元十五年、當州の藉山に落髮せり。元和丁酉の歲、建州乾元寺に受具せり。師は靈苗まほ間出で、道器混成す。桂芳わか少くして以て香を呈し、松柏新たにして而して節あつわを見す。始め稚子より朋遊に狎せず。會稽の藜林を尋ねて五洩の密印に喫えり。

・同住龜山 伝灯録卷十龜山正原禪師の条によれば龜山の二世が正原である。同じく卷九の龜山智眞が龜山を開創したとある。同住したのは智眞であつたことになる。なお祖堂集のこの段には両禪師の偈が混在しているようである。

師、偈有りて曰く、滄溟幾度か桑田に変わりしも、唯だ虚空有つて獨り湛然たり。已に岸に到りし人は筏を恋うことを休やめよ、未だ

曾つて度らざる者は舟を須いるに任す。

又云く、師を尋ねて認得せり本心源、兩岸俱に玄にして一は全からず。是れ佛にして何ぞ須いん更めて佛を求むることを、只だ此れに従つに因つて便ち言を忘る。

・兩岸俱玄一不全 わかりにくい一句であるが、中論觀四諦品の「若不依俗諦、不得第一義。不得第一義、則不得涅槃」という偈に現れているような思想を下敷きにして考えればよいかもしれない。

又云く、忍仙林下坐禅せし時、曾つて歌王の四支を載つことを被れり。況や我が聖明此の事無し、只だ道うを休めしむるも亦何をか悲しまん。

・忍仙云 仏がかつて忍辱仙人となつて歌利王に身体を割かれた話し。金剛經などにでる。なおこの偈は、伝灯録においては龜山智眞のものとされ、「値武宗澄汰、有偈二首示衆曰」として出される一偈の一である。

又云く、心は本より塵を絶す何ぞ洗つことを用いん、身中に病無し豈に醫を求めんや。是れ佛にして身處に非ざることを知らんと欲すれば、明鏡高く懸かりて未だ照さざる時。

・この偈も伝灯録では智眞のものとされる。

師は亨齡七十八、僧と為るもの五十四夏、勅して性空大師惠觀の塔と謚す。後、天祐二年龍集乙丑八月、閩王重ねて塔を建つ。凡是國家の祈禱、生民に靈應し、今に至る迄、香燈焰を續ぐ。天龍仰ぎ衛り、土庶傾瞻す。龜山の二眞身と号す。梁の開平四年庚午の歳に至り、省鄴碑文を製せり。

芙蓉和尚、帰宗に嗣ぐ、福州に在り、師、諱は靈訓、福州候官縣の人なり。姓は危。

初めて帰宗に参見して問う、如何なるか是れ佛。宗云く、你に向かつて道わば你是還た信ずるや。對えて曰く、和尚若し道わば那ぞ敢えて信ぜざらん。宗云く、信ずれば即ち是れ佛なり。即ち汝便ち是れ。師云く、如何んが保任せん。宗云く、一翳目に在れば空花乱墮す。師、玄旨を領受し便ち芙蓉を創む。住持すること嚴整にして海内名を聞けり。入滅の後、勅して弘照大師圓相の塔と謚す。

・信即是佛 この一句は伝灯録の同じ問答の中にはない。

・一翳在目空花乱墮 眼にちよつとでも病があるとまぼろしの花が空中をみだれ飛ぶ。臨濟録に「金屑雖貴、落眼成翳」とあるのを参照。

岑和尚、南泉に嗣ぐ、湖南に在り。未だ實録を覩ざれば化縁の始終を決せず。

問う、如何なるか是れ諸佛の師。師云く、直きを拗して曲がれると作す可からず。

問う、何が諸佛の師ですか。師が云う、まっすぐなものを折って曲がったものにはできない。

問う、如何なるか是れ向上の一路。師云く、一里二里。僧云く、請う師道え。師云く、三里四里。

問う、如何なるか是れ學人の心。師云く、盡十方世界是れ汝が心。僧云く、与摩ならば則ち學人、身を著く處無し。師云く、是れ汝の身を著く處なり。僧云く、如何なるか是れ學人の身を著く處。師云く、大海は水深く又更に深し。僧云く、學人會せず。師云く、魚龍出沒し昇沈するに任す。

問う、何がわたしの心でしょうか。師が云う、盡十方世界がお前の心だ。僧が云う、だとするとわたしには身の置きどころがありません。師が云う、お前の身の置きどころだ。僧が云う、何がわたしの身の置きどころでしょうか。師が云う、大海は水深くさらにさらに深い。僧が云う、わたしにはわかりません。師が云う、魚龍が出没し昇沈するままだ。

・大海水深云 盡十方世界是汝心なる心海にすっぱりと身をおいたらどうか。

問う、古人言有り、動は是れ法王の苗、寂は是れ法王の根なりと。如何なるか是れ法王の根。師は露柱を指して云く、何ぞ大土に問取せざる。僧云く、如何なるか是れ法王の苗。師云く、什摩と道うぞ、什摩と道うぞ。

問う、古人が云っております。動は法王の苗であり、寂は法王の根であると。何が法王の根でしょうか。師は露柱を指さして云う、どうして大土に問わないのだ。僧が云う、何が法王の苗でしょうか。師が云う、なに、なに。

・古人 不明。

・動是法王苗云 動寂、苗根はいわゆる用と躰に当たるであらう。

問う、學人地に據らざる時如何ん。師云く、什摩の處に向かつて安身立命せん。師云く、學人却つて地に據る時如何ん。師云く、死屍を拽ぎ出だせ。

問う、如何なるか是れ本来の地。師云く、一步両歩。僧云く、本来の地、是れ地なりや、是れ地ならざるや。師云く、三歩四歩。

會和尚云く、未だ諸聖有らざる已前作摩生そせまひん。師云く、魯祖開堂し亦た師僧の与に東話西話せり。

會和尚が云う、いまだ諸聖がいなかった以前、どうですか。師が云う、やはり魯祖和尚が開堂して、師僧に向かつてあれこれ話

をされたものです。

・會和尚 東寺如會。

三聖和尚問う、請う和尚向上を説け。師云く、闇梨眼瞎し耳聾して什摩をか作す。

・三聖和尚 後にも出る。

問う、如何なるか是れ玄旨。師云く、虚空道い得。僧云く、虚空常に道う、還た断ずる時有りや。師云く、徒に念静を勞す。

・徒勞念静 住心銘に「不識玄旨、徒勞念静」とある。

問う、請う和尚道え。師云く、重ねて道う可からず。

問う、如何なるか是れ沙門の眼。師云く、長長に出ずること得ず。又云く、佛と成り祖と成るも出ずること得ず。六道に輪廻するも亦た出ずること得ず。汝道え、什摩をか出ずること得ざる。僧便ち問う、未審し、什摩をか出ずること得ざる。師云く、昼には日を見、夜には星を見る。僧云く、學人會せず。師云く、妙高なる山色青く又青し。

問う、何が沙門の眼でしょうか。師が云う、とこしなえに出ることができない。又云う、仏となり祖となっても出ることができないし、六道に輪廻しても出ることができない。云うて見なさい、何から出ることができないかを。そこで僧が問う、何から出ることができないのでしょうか。師が云う、昼には日を見、夜には星を見る。僧が云う、わたしにはわかりませんが。師が云う、妙高なる山色は青いが上にも青い。

・この問答は、伝灯録では、「盡十方世界是沙門眼」ではじまる有名な上堂のあとに行われたことになっている。上堂の語

を参照しながら理解すべきものであろう。

問う、如何なるか是れ異類。師云く、尺短寸長、寸長尺短。

・尺短寸長 楚辞卜居に云う「尺有所短、寸有所長」。人間の物差しでははかれない、負の世界。

問う、上上の人、相見する時如何ん。師云く、死人の手の如し。如何なるか是れ上上人の行李の處。師云く、死人の眼の如し。

問う、如何なるか是れ無情説法。師、東辺の露柱を指して云く、這個の師僧説き得。僧云く、什摩人が聞くことを得る。師、西辺の露柱を指して云く、這個の師僧聞くことを得。僧云く、師は還た聞かば。師云く、我れ若し聞かば則ち誰をしてか拳せしめん。

問う、無情説法とはどういふものでしょうか。師は東がわの露柱をさして云う、このお坊さんが説き得る。僧が云う、誰が聞くことができるのですか。師は西がわの露柱を指さして云う、このお坊さんが聞き得る。僧が云う、和尚さんには聞こえますか。師が云う、わしにもし聞こえたら誰に無情説法の話をとりあげさせるか。

・卷三慧忠国師の伝に「禅客曰、無情既有心、還解説法也無。師曰、他熾然説、恒説常説、無有間歇。禅客曰、某甲為什摩不聞。師曰、汝自不聞、不可妨他有聞者。進曰、誰人得聞。師曰、諸聖得聞。禅客曰、与摩則衆生心無分也。師曰、我為衆生説、不可為他諸聖説。禅客曰、其甲愚昧聾聵、不聞無情説法。和尚是為人天師、説般若波羅密多、得聞無情説法不。師曰、我亦不聞。進曰、和尚為什摩不聞。師曰、頼我不聞無情説法。我若聞無情説法、我則同於諸聖。汝若為得見我及聞我説法乎。禅客曰、一切衆生畢竟還得聞無情説法不。師曰、衆生若聞、即非衆生」とあるのを参照。

師、衆に示して云く、富貴なるときは則ち易く、貧窮なるときは則ち難し。又云く、今時の禅師、只だ天子を識得するのみにして、

終に未だ天子と作らざる已前を識せず。

師は衆に示して云われた、富貴であるときにそれを見てとるのはたやすいが、貧窮であるときにそれを見てとることはむづかしい。また云う、今時の禪師は、天子を見てとるだけで、決して天子とならない以前を見てとらない。

師、勸學の偈に曰く、万丈の竿頭未だ休むを得ず、堂堂として路有るも人の遊ぶ少し。禪師南泉に達し去らんと欲すれば、万目の青山万万の秋。

問う、如何なるか是れ平常心。師云く、眠らんと要すれば則ち眠り、坐らんと要すれば則ち坐る。僧云く、學人不會。師云く、堪ければ則ち涼を取り、寒ければ則ち火に向かう。

問う、人有つて和尚に問えば、和尚は則ち問に随つて答話す。忽に人の問うこと無き時、和尚は如何ん。師云く、困すれば則ち睡り、健なれば則ち起つ。僧云く、學人をして什摩の處に向かつてか會せしむる。師云く、夏天は赤骨の身、冬天は須く被を得べし。

問う、南泉遷化して什摩の處に向かつてか去る。師云く、東家に驢と作り、西家に馬と作る。僧云く、學人不會。師云く、騎らんと要すれば則ち騎り、下らんと要すれば則ち下れ。

師、松竹を斫る人を誡め、偈ありて曰く、千年の竹、万年の松、枝枝葉葉盡く皆同じ。為に報ず四方參學の者、手を動かせば祖翁を觸すに非ざるはなし。

・ 祖翁 伝灯録では祖公となっている。



師、投機の偈に曰く、處處眞にして處處眞なり、塵塵盡く是れ本来人。眞實に説く時は聲現ぜず、正躰堂堂として身を没却す。

問う、如何なるか是れ西來の祖教。師、良久す。學人敢えて進語せず。

師、侍者をして會和尚の處に去きて問わしむ、和尚南泉に見えし後如何ん。會和尚良久す。侍者進みて云く、未だ南泉に見えざる已前、事は如何ん。會和尚云く、別に更に有る可からず。侍者却歸して師に拳似す。師、當時に偈有りて曰く、百尺竿頭不動の人、入るを得ると雖然も未だ眞と為さず。百尺竿頭須く歩を進むべし、十方世界是れ全身。

師は侍者をやって會和尚の処に行つて問わせた、和尚さん南泉和尚に会われて後いかがですか。會和尚は良久する。侍者は進んで云う、まだ南泉和尚に会われていなかった以前、事態はどのようでしたか。會和尚が云う、別に有るはずがない。侍者は歸つて来て師に拳似する。すると師はすぐに偈を作つて曰く、百尺竿頭不動の人、悟入しているけれどもほんとうじゃない。百尺竿頭に歩を進めねばならぬ、そうしてこそ十方世界が全身である。

・會和尚 前出。なおその上堂の語に、南泉の「心不是佛、知不是道」という言葉を批判したものがあつた。

三聖和尚問う、承らく師に言有り、百尺竿頭須く歩を進むべしと。百尺竿頭は則ち問わず。百尺竿頭如何んが歩を進めん。師云く、朗州は山、禮州は水。進んで曰く、更に和尚の道わんことを請う。師云く、四海五湖王化の裏。

亡僧遷化して什摩の處に向かつてか去る。師云く、歴劫無言なるは眞の性命、解く語り能く行くは却つて死人。

三聖和尚、秀上座をして師に問わしむるらく、南泉遷化して什摩の處に向かつてか去ると。師云く、石頭沙弥たりし時、六祖に参見せり。上座云く、石頭沙弥たりし時、六祖に参見せしことは問わず。南泉遷化して什摩の處に向かつてか去る。師云く、伊かれをして尋思し去らしめよ。上座云く、千尺の松有りと雖も、且つ條を抽んずる石筍無し。師、嘿然たり。上座礼拝し起ちて云く、師の答話を謝す。師又た嘿然たり。上座却歸して三聖に拳似す。三聖云く、若し實に此くの如ければ林際に勝るもの七歩。此くの如しと雖然いへども、待まに我れ更に驗し看まん。

明日に至り、三聖問訊して曰く、昨日那个の師僧に答えし一轉の因縁、只だ是れ光前絶後にして古今聞くこと罕なり。師は又た語らば。

三聖和尚が秀上座をやって師に問わせた、南泉は遷化してどこへ行つたかと。師が云う、石頭は沙弥だつたころ六祖に参見した。上座が云う、石頭が沙弥だつたころ六祖に参見したことは問題ではありません。南泉は遷化してどこへ行つたのですか。師が云う、かれに考えさせる。上座が云う、千尺の松はあるけれども、枝を生やす石筍がない。師は默然としている。上座は礼拝してから起ち上がつて云う、お答え有りがとつございました。師はまた默然としている。上座は歸つて来てから三聖に拳似する。三聖が云う、もしほんとうにそつだとすれば林際より七歩まざつてゐる。しかしわしがさらに確かめてみよう。

次の日になつて、三聖はたずねて云つた、昨日あの坊さんにお答えになつた因縁は、全く空前絶後で、古今に聞いたためしがありません。師はまた何も云わない。

・石頭作沙弥時云 石頭の伝に「六祖遷化時、師問、百年後、某甲依什摩人。六祖曰、尋思去。」とある。

・勝林際七歩 林際の師となる資格があるといふこと。

師、事によりて頌して曰く、自ら覺して佛堂を開き、慧は放つ五道の光。人の佛佛ならざる無きも、意中の蔵を悟らざるのみ。

師、僧に問う、什摩の處より來たるや。對えて云く、洞山より來たれり。師云く、何ぞ洞山をして自ら來たらしめざる。對えて云く、只た与摩なり。師云く、彼自ら瘡無し、以て之を傷くること勿れ。

師が僧に問う、どこから來たか。答えて云う、洞山から來ました。師が云う、なぜ洞山自身で來らせなかつたのか。答えて云う、このとおりです。師がいう、彼にはもともときずはない。そんなことできずつけてはならん。

・彼自無瘡勿以傷之 維摩經弟子品の語。

人有りて問う、如何なるかはれ第二月。師云く、正に是れ第一月。又た云く、恰も是。師乃ち頷して曰く、也大奇、一月の中兩月の疑あり。見と見の縁とに自性無し、常寂にして誰か是に復た誰か非ならん。

ある人が問う、第二月とはどのようなものですか。師が云う、正に第二月だ。また云う、全くそうだ。そこで師は頷を作つて云う、ふしぎだ、ふしぎだ、一つの月に二つの月の疑いだ。見と見の縁に自性はない、常寂にして誰が是であり誰が非であるつ。

・第二月 荷玉の伝に「雲岳掃地次、叫寺主問、何得自駈駈。岳云、有人不駈駈。寺主云、何處有第二月。岳提起筭云、這個是第幾月。玄沙代云、此由是第二月。報慈拈問師、忽然放下掃帚時、作摩生道。師云、大家喫茶去。」とある。また伝灯録の荷玉の伝に「問、如何是文殊。師曰、不可有第二月也。曰、即今事如何。師曰、正是第二月」とある。

又、須弥芥子を納るるの頷に曰く、須弥は本より有に非ず、芥子は元來空なり。空を將つて非有を納る、何れの處にか相い容れざらん。

皓月供奉問つて曰く、教中に説く幻意はれ有なりや。師曰く、大徳是れ何の言か。云く、是れ無なりや。云く、是れ何の言か。云く、与摩ならば則ち幻意は是れ不有不無なりや。師曰く、大徳是れ何の言か。大徳進んで曰く、如し某甲の三明盡く聖意に契わざれ

ば、未審<sup>いぶか</sup>し、和尚如何に教中の幻意を明かすや。師曰く、一切法不思議なるを信ずるや。大徳云く、佛の誠言那ぞ敢えて信ぜざらん。師云く、大徳の信と言うは、二信の中是れ阿那个の信なるや。大徳云く、某甲の信ずる所の如きは、二信の中名けて縁信と為す。師云く、何の教文に依つてか縁信を生ずることを得たる。大徳云く、華嚴經に云く、菩薩摩訶薩、無障無碍の智慧もて、一切世間境界の是れ如来の境界なることを信ず、と。又た曰く、諸佛世尊悉く世界と法性と無差別にして決定して二無きを知ると。又た曰く、佛法と世間法とは若し眞實を見れば一切無差別なり、と。師曰く、起す所の縁信、引く所の教文、甚だ来處有り。老僧、大徳の為に教中の幻意を明さん。偈に曰く、若し人幻の本来眞なるを見れば、是れ即ち名けて見佛人と為す。圓通法界生滅無し、無滅無生是れ佛身の幻意を明さん。偈に曰く、若し人幻の本来眞なるを見れば、是れ即ち名けて見佛人と為す。圓通法界生滅無し、無滅無生是れ佛身。

・皓月供奉 宋高僧傳卷十一釋智感伝に「供奉皓月講涅槃經」とあるのと同一人か。

問う、蚯蚓斬られて兩段し、兩頭俱に動く、佛性阿那原文になし(個頭)に在る。師答えて曰く、動と不動と是れ何の境界なりや。大徳云く、言の典に關せずんば智者の所談には非ず。只だ和尚の動と不動は是れ何の境界ぞと言うが如きは、出づるに何の終よりするや。師答えて曰く、灼然たり、言の典に關せずんば智者の所談には非ず。大徳豈に道つを見ずや、首楞嚴經に云く、當に知るべし、十方無辺不動の虚空、並に地水火風を動揺し、均しく六大と名づく。性眞圓融して皆な如来蔵にして本より生滅無し、と。師、偈有りて曰く、最も甚深なり、最も甚深なり、法界人身便ち是れ心。迷つ者は心に迷つて衆色と為し、悟る時は刹海是れ真心なり。身界二塵實性無し、分明に此に達するを知音と号す。

・言不関典<sup>云</sup> 典籍に拠らない言葉は智者は語るべきではない。

・首楞嚴經 卷三の句。

・この一段、伝灯録には他に別の問答が有る。「又有僧問、蚯蚓・・・師云、妄想作麼。僧云、争奈動何。師云、汝豈不知火風未散」。

大徳有り問う、虚空は為<sup>は</sup>た定んで有なりや、虚空は為<sup>は</sup>た定んで無なりや。師答えて曰く、有と言つても亦た得たり、無と言つても亦た得たり。虚空有る時は但た仮有有るのみ、虚空無き時は但た仮無無きのみ。大徳再び問う、只だ和尚の所説の如きは何の教文に有りや。師答えて曰く、大徳豈に聞かずや、首楞嚴經に云く、十方虚空汝が心内より生ず、猶お片雲大清裏に點するが如し、と。豈に是れ虚空生ずる時は但た仮有有るのみならずや。汝等一人真を發して源に歸らば、此の十方虚空は悉く皆な消殞す、と。豈に是れ滅する時は但た仮滅を滅するのみならずや。老僧所以に道へり、有る時は仮の有、無き時は仮の無なり、と。

ある大徳が尋ねる、虚空は一体有るのでしようか、それとも無いのでしようか。師が答えて云う、有るといつてもよいし、無いといつてもよい。虚空が有るときはただ仮りの有があるだけで、虚空が無いときはただ仮りの無が無いというだけだ。大徳は再び問う、和尚さんがお説きになることはどの教文に有るのですか。師が答えて云う、大徳はお聞きである、首楞嚴經に云つておる、十方虚空は汝の心の中に生ずるのであり、それは一片の雲が晴れ渡つた大空に浮かぶようなものだ。虚空が生ずる時は仮りの有があるのではないか。汝等が真心をおこして源に歸るならば、此の十方虚空はすべてなくなつてしまふ、と。虚空が滅する時はただ仮りの滅が滅するだけではないか。わたしはだから云う、有という時は仮りの有、無という時は仮りの無、と。

・首楞嚴經<sup>云</sup> 卷九の句。

問う、天下の善知識、為<sup>は</sup>た大涅槃を證すや。師云く、為<sup>は</sup>た因中の三徳を問うや、為<sup>は</sup>た果上の三徳を問うや。大徳云く、果上の三徳を問えり。師云く、若し果上の三徳を問わば、天下の善知識は未だ大涅槃を證せず。又た問う、何故に未だ大涅槃を證せざるや。師云く、功未だ諸佛に齊からず、所以に未だ大涅槃を證せず。又た問う、既に功未だ諸佛に齊からず、何故に名けて善知識と為すや。師答えて曰く、明らかに佛性を見るを善知識と為す。皓月云く、若し与摩ならば則ち功何の道に齊きを名けて大涅槃を證すと為すや。偈を以て曰く、摩訶般若の照、解脱甚深の香。法身寂滅の躰、三三理として圓常。功齊き處を識らんと欲せば、此れを常寂光と名く。皓月再び問う、果上の涅槃已に和尚の指示を蒙れり。如何なるか是れ本来の涅槃。師答えて云く、大徳是れなり。

・三徳 法身、般若、解脱の三をいう。涅槃經に説かれる。

・大徳云問果上三徳 原文「大徳云、為問云なるも「為」を削除。

問う、和尚何人に承嗣するや。師云く、我れ人の承嗣する無し。云く、師は還たま参学せしや。師云く、我れ自から参ず。師意如何。師の偈に曰く、虚空万象に問う、万象虚空に答う。何人が親しく問わん、木叉丫角の童。

問う、和尚さんは誰に嗣法なさいましたか。師が云う、私は誰にも嗣法していない。云う、師は参学されましたか。師が言う、私は自分で学んだんだ。師は何を言おうとしておられるのですか。師の偈に云う、虚空が万象に尋ねると、万象は虚空に答える。何人が親しく問えるだろうか、ふたまたつの髪の子供。

問う、如何なるか是れ教。師云く、五千四十八巻。如何なるか是れ教意。師曰く、師意即ち是。問う、如何なるか祖師意。師云く、教意即ち是。學云く、与摩ならば即ち教意と祖意と無二にし去る。師云く、十方佛土中唯だ一乘法のみ有り。一無くまた三も無し。大徳便ち礼拝す。師の偈に云く、祖心即ち教意、教意即ち祖意なり。祖師意を識らんと欲せば、祖師佛心を傳う。祖意と教意と、一性にして一真心なり。

問う、教とはどのようなものですか。師が云う、五千四十八巻の経だ。教意はどのようなものですか。師が云う、祖意がそつだ。問う、どのようなのが祖師意でしょうか。師が云う、教意がそつだ。学人が云う、そうなら教意と祖意とは同じものになってしまいます。師がいう、十方の仏土中には、ただ一乗の法だけあって、二もなければ三もない。大徳はすぐさま礼拝した。師の偈に云う、祖心がそのまま教意であり、教意がそのまま祖意である。祖師意を識りたいのなら、祖師は仏心を伝えているということだ。祖意と教意は、一性であり一の真心である。

・十方仏土中云 法華経方便品の句。

問う、第八識及び七六識等、畢竟無躰。云何が第八識を転じて大圓鏡と為すと云うを得ん。師答えて曰く、豈に聞かずや、名を転じて體を転ぜず。師の偈に曰く、七生ずるは一の滅するに依り、一滅するは七生ずるを持す。一滅すれば滅も亦た滅し、七六永く無生なり。第九真常識、後に非ず亦た先に非ず。後に非ず先に非ざるの義、常住にして永く遷る無し。

問う、第八識と七、六識等は畢竟無躰だといふのに、どうして第八識を転じて大圓鏡智となすといふことができるのでしょうか。師が答えるには、言つてはないか、それは名を転じてるのであって體を転じてるのではない。そこで偈をつくつて云われた、七識が生じるのは第八識が滅するのにより、第八識が滅して七識を生じさせる。第八識が滅すれば滅ということもなくなり、七六識は永久に生ずることがない。それは第九真常識といふことであつて、それには先とか後とかはない。先後が無いものは常住であつて、永久に転変することがない。

・第九真常識云 真諦を祖とする攝論宗で九識説をたてる。金剛三昧經本覺利品にも出る。

問う、古人の言つ有り、了せば即ち業障は本来空、未だ了せずんば心に宿債を償すべし、と。師子尊者と二祖大師とは甚摩と為てか却つて債を償する。師云く、大徳は本来空を識らず。皓月云く、如何なるか是れ本来空。師云く、業障是れ。如何なるか是れ業障。師云く、本来空是れ。皓月礼謝す。師偈に云く、仮の有は元より有に非ず、仮の滅も亦た無に非ず。涅槃と債を償するの義、一性に於て更に殊なる無し。

問う、本心は何の故に生滅心を離れず、生滅心は何の故に本来心に当たらざるや。師は偈を以て答えて曰く、妙空妙用不思議、滅する無く生ずる無く依る所無し。本覺性眞は智の父と為し、父の智子を生ずるは妙難思。智智不覺にして元來妙、達見無觀即ち本如なり。父子は本来二相無く、即今即本にして更に時無し。

・古人有言 証道歌「了即業障本来空、未了応須還宿債」。

・師子尊者「復有此丘名曰師子、於罽賓國大作仏事。時彼國王名弥羅掘、邪見熾盛、心無敬信、於罽賓國殷壞塔寺、殺害衆僧。即以利劍用斬師子、頂中無血、唯乳流出。相付法人於是便絶」(付法藏因緣伝六、大正五十卷三二下)。

・二祖大師「恒遂深恨、謗惱於可、貨賂俗府、非理屠害」(続高僧伝一六、大正五十卷五五二上)。

・妙難思 法ヶ経方便品の語。

問う、如何なるか是れ陀羅尼。師云く、大徳問う無く、老僧答つる無し。又た問う、是れ何人か誦し得る。師は禪床の左臂を指して云く、這個の師僧誦し得。又た問う、何人か聞くを得る。師は禪床の右臂を指して云く、這個の師僧聞くを得。大徳云く、某甲は什摩と為てか聞かざる。云く、豈に道うを聞かずや、真の誦は響無く、真の聴は聞く無し、と。大徳云く、与摩なれば即ち音聲は、法界の性に入らざるや。師云く、大徳豈に道うを聞かずや、色を離れて觀を求むるは正見に非ず、聲を離れて聞を求むるは是れ邪聞なり、と。又た問う、如何なるか是れ色を離れざるは是れ正見、聲を離れざるは是れ真聞。師云く、大徳よ、老僧の相い助けて明かすに頌を以てするを聴け。曰く、滿眼本と色に非ず、滿耳本と聲に非ず。文殊は常に觸目し、觀音は耳根を塞ぐ。三を会すれば元より一体、四に達すれば本と同真。堂堂の法界性、佛無く亦た人無し。

問う、善財童子は什摩と為てか無量劫に普賢身中世界に遊びて遍ねからずや。師云く、無量劫より来たり、還た遍く遊び得るや。又た問う、如何なるか是れ普賢身。云く、含元殿裏に更に長安を覓む。問う、如何なるか是れ文殊。師云く、墻壁瓦礫即ち是れ。問う、如何なるか是れ觀音。師云く、音聲語言即ち是れ。問う、如何なるか是れ普賢。云く、衆生心即ち是れ。問う、如何なるか是れ仏。師云く、衆生の色身是れ仏。問う、恒沙の諸仏は体皆な同じ、何の故か種種の名号有りと説くや。師云く、眼根の源に返るを名ずけて文殊と為し、耳根の源に返るを名ずけて觀音と為し、意識の源に返るを名ずけて普賢と為す。文殊は是れ仏の妙觀察智、觀音は是れ仏の無縁大悲、普賢は是れ仏の無為の妙行なり。三聖は是れ仏の妙用、仏は是れ三聖の真躰なり。用は恒沙の仮名有るも、躰は惣に



名ずけて一博伽梵となす。又た問う、四聖は定んで是れ四となすや。師云く、燈は千室に分かるも元よりはれ一光なり。潮は万波に応ずるも本来は一水なり。迷人は差別するも智者は同じく真とす。是の故に先徳の云く、唯だ我れ今独り達了するに非ず、恒沙の諸仏は躰皆な同じ、と。

・含元殿 唐の宮殿の名。

・三聖 文殊、觀音、普賢を指す。但し、この用法は他に見られない。

・四聖 三聖に仏を加える。同じく、他に例がない。敕修清規では阿弥陀仏、觀音菩薩、勢至菩薩、大海衆菩薩を四聖とする。

・先徳云 証道歌「非但我今独達了 河沙諸仏体皆同」。

問う、教中に言つ有り、十劫に道場に坐して佛道を成ずるを得ず、と。未審いざかし、此の意は如何ん。師云く、佛は是れ果、菩薩は是れ因なり。釈迦如来は果地に於いて談じ、大通智勝佛は因中の事なり。大通智勝佛は十劫に菩提樹下金剛座上に在りて結跏趺坐すと雖も、猶を是れ菩薩なり、成佛せざる故なり。彼の時の衆生は寿命長きが為の故に、根の未だ熟さざるが故なり。十劫を過ぎ已つて、衆生の根は始めて熟す。大凡、菩薩は衆生の根の熟すを待ちて、雞の啼を伺いて啼啄同時なるが如かるべし。衆生の根の熟して、便ち佛の菩提を成ず。故に言つ、十劫を過ぎ已つて無上菩提を証得すと。所以に經に曰く、佛は時の未だ至らざるを知りて、請を受くるも默然として坐す、と。

・教中有言 法華經三、「大通智勝佛、十劫坐道場。佛法不現前、不得成佛道。」(大正九卷二六上)。

・經曰 法華經三、大正九卷二六中。臨濟録「問、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成仏道。未審此意如何。乞師指示。師云、大通者、是自己於处处、達其万法無性無相、名為大通。智勝者、於一切处不疑、不得一法、名為智勝。仏者心清淨、光明透徹法界、得名為仏。十劫坐道場者、十波羅密是。仏法不現前者、仏本不生、法本不滅、云何更有現前。

不得成仏道者、仏不應更作仏。」

人有りて問う、如何なるか是れ觸目菩提。師答えて曰く、一切法は常住なり。如何なるか是れ一切法は常住なる。師曰く、觸目菩提。

問う、如何んが山河大地を転じて自己に歸し去る。師答えて曰く、我れ却つて自己を転じて山河大地に歸し去るを憂う。学人礼謝す。師の偈に曰く、誰か山河の転ずるを問う、山河は誰に向かつてか転ぜん。圓通して両畔無し、法性は本と歸する無し。

問う、如何なるか是れ色は本と質像を殊にする。師曰く、尽十方世界は是れ什摩ぞ。進んで曰く、如何なるか是れ声は元と樂苦を異にす。師答えて曰く、將ち來たれ、將ち來たれ。

・色本殊質像、声元異樂苦 參同契の語

問う、教中に言う有り、色は空に異らず、空は色に異ならず、と。未審し、教の意は如何。師は偈を以て答えて曰く、礙する処は牆壁無く、通する処は虚空なし。若し能く是の如く解せば、心と色は本来同じ。

自外は具さに別録に載す。謚して招賢大師と号す。

白馬和尚、南泉に嗣ぐ、江陵に在り、師諱は曇照、未だ実録を觀ず。

問うて曰く、如何なるか是れ學人の自己。師、杖を以て當面に學人を指す。長慶和尚、此の因縁を拳して手を以て面前を指して云く、古人は只だ与摩なり。又た指を豎起して云く、与摩と何似ん。順徳大師云く、蝦は跳れども蚪を出でず。慶肯わず。自ら代わつ

て云く、是れ什摩の心行ぞ。

尋ねて云う、何が學人の自己ですか。師は杖で正面切つて学人を指す。長慶和尚は此の因縁を取り上げて手で面前を指して云う、古人はこのようだ。更に指をつつたてて言う、これとどうだ。順徳大師が云う、蝦は跳つても蚪を出ない。長慶は認めないで、自分で代わつて云う、どついつつもりか。

・蝦は跳れども云 長慶をくさしたもの。捕られたえびは跳ねても容れ物の外には出られない。同じパターンでしかない。  
・是れ什摩の心行ぞ 相手を非難している。

下堂和尚、南泉に嗣ぐ、襄州に在り。

俗官有り問う、蚯蚓断たれて、両頭惣に動く、佛性阿那个頭に在りや。師、両手を展開して示す。洞山和尚云く、即今問う底、阿那个頭に在りや。

ある俗官がたずねる、みみずか切られてどちらの頭もうごく、仏性はどちらの頭にあるのですか。師は両手をひろげてみせる。洞山和尚が云う、いまたずねているのは、どちらの頭にいるのか。

・洞山和尚云 洞山は、師が両手をひろげてみせたのが気に入らずに代語したもの。

雙峯和尚、南泉に嗣ぐ、師諱は道允、姓は朴、漢州雋嶺の人なり。累葉の豪族にして祖も孝も仕宦し、郡譜に之を詳かにす。母は高氏、夜に異光熒煌として室に満つるを夢み、愕然として眠り覚するに、身を懷む若き有り。父母謂いて曰く、夢る所は常に非ず。如し兒子を得ば盃ぞ僧に為さざらん。胎に寄ること十有六月にして載ち誕る。介の後、日に將り月に就り、鶴白鸞姿、举措は儕に殊り、風規異格。竹馬の年、花を摘んで佛に供し、羊車の歳、塔を累ねて情を娛します。玄関の趣照然たり、真境の機卓介たり。年十八に當り、二親に懇露して俗を捨てて僧と為る。鬼神寺に適きて、華嚴教を聴く。禪師竊に謂いて曰く、圓頓の筌筮、豈に心

印の妙用に如かんや。遂に毳を被し瓶を挈げ、雲に拈み水に枕す。長慶五年に泊んで入朝使に投じて其の宿志を告ぐ。許すに同行を以てす。

既に彼岸に登り、南泉普願大師に観まゆることを獲、師資の礼を伸べ、目擊道存す。大師歎じて曰く、吾が宗の法印、東國に帰せん。會昌の七祀、夏初の日を以て、旋りて青丘いに届る。便ち楓岳に居り、求め投ずる者風のごとく馳せ、霧の如く集る。慕い来る者星のごとくに逝き、波のごとくに奔る。是に於いて景文大王名を聞いて帰奉し、恩渥日に崇し。

咸通九載、四月十八日、忽ち門人に訣して曰く、生や涯り有り。吾れ須く遠邁すべし。汝等雲谷に安栖し、永く法燈を耀かせ、と語り畢つて胎然として遷化す。報年七十有一、僧臘四十四霜。五色の光、師の口従り出で、蓬勃として天に散漫す。伏して以みるに今上、寵は法侶を褒め、恩は禅林を霑す。仍りて賜諡す激鑿す禅師澄昭の塔。

・羊車の歳 法華經譬諭品の火宅三車の語を踏まえたもの。

・累塔 同経方便品「乃至童子戲聚沙為佛塔云」。

・懇露 心情を吐露することか。

・目擊道存 莊子田子方篇の語。一目見ただけで道を体得していることが分かる。

・筌筌 莊子外物篇「筌者所以在魚、得魚而忘筌云」。

## 祖堂集卷第十七